



## ワイルド悲劇全集

荒井良雄編

エロスの愛の究極を描いた「サロメ」、世紀末の美にひたりきったオスカ・ワイルドの悲劇五編の全訳。戯曲を読む楽しさはワイルドに尽きるといっていい。  
定価一八〇〇円

## 漢詩への招待

石川忠久

放送で長く漢詩の講座をつづけている著者のやさしい漢詩入門。原詩に読み下し文、訳詩を並列し、時代ごとに当時の雰囲気を見事に伝える解説を付す。中国の歴史への旅に必携。定価二〇〇〇円

## ワイルド喜劇全集

荒井良雄編

「ウィンゲミア卿夫人の扇」をはじめワイルド喜劇四編の全訳。世紀末への警句と名言にみちたワイルド喜劇は、姉妹編「ワイルド悲劇全集」とともに、演劇の楽しさを伝える。  
定価二七〇〇円

## 音楽の風景

外山雄三

NHK交響楽団の正指揮者であり作曲家でもある著者が、幼い日や演奏活動の思い出、第九の合唱に参加している人々への熱いメッセージなどを綴った珠玉のエッセイ集。定価二二〇〇円

## イギリス演劇と映画

荒井良雄

イギリスの演劇と映画を比較しながら、シェイクスピア、ワイルド、ショー、カワード、ラティガンなど代表的劇作家の映画家作品を論じたユニークな研究書。  
定価二〇〇〇円

## ゲートと仏教思想

星野慎一

ゲートの文学や思想を、仏教的風土の日本人の心情から理解しようとしたユニークなゲート論。とくにゲートの自然にたいする考へ方に東洋の自然観との共通性を発見している。定価二〇〇〇円

## 坪内逍遙研究資料 第十二集

逍遙協会編

日本の小説・戯曲の近代化に不朽の業績をのこした坪内逍遙とその周辺の文学状況を知るために不可欠の資料、論文を取録。本集には「当世書生気質」の戯曲全文を掲載。  
定価一八〇〇円

## ショーペンハウアーの笛

梅崎光生

古今東西の哲学者、宗教家の思わぬ人間性を描いた軽妙洒脱の名エッセイ。とくに生死の問題への著者独特の目が光る。こういう哲学の講義ならぜひ聞いてみたいと思いたくなる本。定価二〇〇〇円

## 二つの世紀末

井村君江

(協会会長・明星大学教授)

「英国では近代はワイルドから始まる」吉田健一著『ヨオロッパの世紀末』の冒頭の一句である。「世紀末の美と愛」と題するシリーズ(集英社)の「異神と殉教者」(3)の中で、辻邦生との対話中、丸谷オーはこの一句にふれ、「近代」というのは「モダニズム」の訳語であろうと指摘している。世紀末はモダニズムのアンティテーゼとして出てくるものであるから、言葉を置きかえてもモダニズム→世紀末→現代に続く思潮の中でのワイルドの意義を、強調することに変わりはないようである。

英独仏伊露の世紀末へ招待するこの6巻や、「世紀末の夢」「ピアズレーと世紀末」、「世紀末のウィーン」、「世紀末御伽草紙」等々、書店の一隅には世紀末コーナーが出来そうな現今である。しかし世紀末とは何かとなると、その本の数だけ世紀末があるようで、まさに万華鏡カレイドスコープ的な美と夢の祝祭のプログラムである。

明治時代に「退化論」としてわが国に世紀末の一つの見方を示した Max Nordeau の英訳 *Degeneration* (1893) が、丸善の店頭に出たのが明治35年であるから今より85年前、ワイルドは退廃テカザンの徒、悪魔主義の旗手として攻撃的存在であった。そしていま再び、昭和の世紀末時代に生きる信じ人々はワイルドを世紀末の英雄にまつりあげているが、それらの人々が19世紀末の時代に投げる眼差しは、時として回顧的なノスタルジックなものであり、また憧憬と渴望の交錯した陶酔の霧に曇っている。世紀末という重層的曖昧さの霧を払いながら、ワイルドのあり方とその意義を見据えていくことは、アブリオリーに要求される大切な営為であろう。

ワイルド協会はこの十年、主として各作品研究を、テーマ中心に講演・シンポジウム・研究発表、そして雑誌に中核をまとめるという方法でその試みを続けてきたが、更にいま次の段階へさしかかっている。ワイルドをその周囲の人々から照射し、その時代背景に浮かして見ていこうとするもので、本誌に掲載されている Douglas, Constance, Gide からのシンポジウム、Max Beerbohm (前川氏の講演)、Sherlock Holmes (堀江氏) からの究明は、これまでに見られなかったワイルドの姿を垣間見させてくれて貴重である。更に1987年夏期セミナーでは、Ruskin と Pater、また Maughm との関連から、ワイルドの美意識にたいする究明がなされる予定で、有意義な結果が期待される。

明治時代ワイルドに貼られていた退廃悪魔主義者のレッテルは既に落ちたようだが、84年経つ今日、まだわが国では正当な目で見据えたワイルド論は少い。将来本協会に依る研究や討論の中から、多くのすぐれた成果が生れることが期待される。いまデカダンの、享乐的・耽美的といった世紀末を彩る形容辞の万華鏡の陶酔の幻暉から覚めた眼で、ワイルドとかれの生きたイギリス19世紀の世紀末を見つめ直す必要があろう。そうすれば今世紀の世紀末の特性も見えてくるであろうし、昭和に於けるワイルドの位置も見据えられてくる筈である。明治は遠くなったが、明治に入れたものは、まだわれわれに近い。

(1986年秋期講演会での挨拶の要旨)

## 目次

二つの世紀末	井村 君江	2
第8回夏期セミナー講演要旨		
マックス・ピアボウム『過去を覗く』のワイルドについて	前川 祐一	4
第8回夏期セミナー・シンポジウム		
特集「ワイルドと周囲の人たち」		
—ダグラス、コンスタンス、ジイド—		
ダグラスという男	西村 孝次	6
The Importance of Being Constance	井村 君江	9
ワイルドとジイド	堀江 珠喜	12
第11回秋期講演要旨		
ワイルドの時代とシャーロック・ホームズ	堀江珠喜	14
第11回秋期研究発表要旨		
Oscar Wilde の風習喜劇の言葉		
—喜劇性構築のレトリック—	梅津 義宣	16
第11回秋期研究発表要旨		
「ウィンダミア夫人の扇」について		
—扇の劇的効果を中心に—	土橋 初枝	20
ワイルド書誌	麓 常夫	18
1987年度日本ワイルド協会夏期セミナー案内		19
編集後記		22